17世紀から18世紀初頭のモンゴル年代記について

——特に『蒙古源流』と『シラ・トゥージ』との關係を通して——

森　川　哲　雄

1　は　じ　め　に
2　『シラ・トゥージ』の編纂年代について
3　『蒙古源流』と『シラ・トゥージ』との關係
　(1)　インドの最初の王について
　(2)　中國の皇帝の系譜
　(3)　チンギス・ハーンの遠征活動についての記述
　(4)　チンギス・ハーンが死の直前にギルゲン・バートゥルに應えた詩
　(5)　ゴデン・ハーンについて
　(6)　アルタン・ハーンがシタウ・ハンの稱號を得たこと
4　『アサラクチ史』と『シラ・トゥージ』との關係
　(1)　ダライ・ラマが說いたという書物からの引用
　(2)　ダヤン・ハーンの諸子についての記述
　(3)　リグダン・ハーンの稱號について
5　17世紀のモンゴル年代記と18世紀のモンゴル年代記の關係
6　お　わ　り　に

1　は　じ　め　に

モンゴル史研究にとってモンゴル語の史料が重要であるということは言うまでもない。しかしモンゴル帝國時代に『元朝祕史』が編纂されて以降，モンゴル語によるまとまった歷史編纂物は17世紀頃になるまで見ることが出來ない。16世紀後半のチベット佛教の再流入がモンゴルの文化狀況に大きな影響を與えたが，この結果モンゴル知識人による，モンゴル文で記されたモンゴル史が數多く編纂されるようになった。初期，すなわち16世紀末から18世紀初頭に編纂されたものとしては『チャガン・テウケ *Čayan teüke*』，『アルタン・ハーン

傳』，兩『アルタン・トプチ *Altan tobči*』，『蒙古源流 *Erdeni-yin tobči*』，『アサラクチ史 *Asarayči neretü-yin teüke*』，『シラ（シャラ）・トゥージ *Sira tuγuji*』などがあげられる。これらのうち『チャガン・テウケ』と『アルタン・ハーン傳』以外の各年代記には同じような記述が多く見られ，互いに密接な關係が存在することを示している。

上にあげた比較的初期に編纂された年代記の中には，誰が，何時編纂したのかを記していないものが多く，またその表題についてさえ不明確なものもある。このことは明代から清初のモンゴル史研究にこれら年代記を利用する場合に決して看過し得ない問題を含んでいる。こうした年代記の編纂年代について早くから議論されたのが著者不明『アルタン・トプチ』（ČQČ）とロブサンダンジンの『アルタン・トプチ』についてであった。これら2つの『アルタン・トプチ』は記述上多くの共通點があり，關係があることは明らかであるが，共に編纂年代が記されていない。しかし著者不明のものは記述が簡略であるが，リグダン・ハーンの治世で終わっているのに對し，ロブサンダンジンのものは『元朝祕史』の3分の2の文章を含み，記述は豊富であるものの，17世紀後半に及ぶ事柄が見られる。そのためどちらが早く編纂されたのかについて關心が持たれ，(1)著者不明のものが早く編纂され（17世紀前半），それに書き加えをしたのがロブサンダンジンのものという説と，(2)ロブサンダンジンのものが早く，著者不明のものはその節略本であるという2つの見解が出されている[(1)]。筆者はこの問題について『蒙古源流』との關係で檢討を試み，その中で『蒙古源流』は『アルタン・トプチ』の記述を利用していることを指摘した。他方ロブサンダンジンの『アルタン・トプチ』は現在の研究では17世紀末から18世紀初めに編纂されたと言うのがほぼ定説になっていること，著者不明の『アルタン・トプチ』はそれよりも早く編纂されたとみてよいこと，『蒙古源流』は1662年頃に編纂されたとされることなどから，この點に關しては(1)の説に與した（森川

(1) 例えば著者不明『アルタン・トプチ』が早く，17世紀前半に編纂されたと言う説は多く，Puchkovskij (1953, pp. 144-146)，Bawden (1955, p. 13)，吉田順一 (1974, pp. 61-64)，包文漢，喬吉 (1994, p. 36) その他多くある。他方，第2の説，すなわちロブサンダンジンのものの方が早いとする説は，Heissig (1959, pp. 75-79)，岡田英弘 (1965, p. 21) などである。

哲雄，2000，pp. 220-228)[2]。

『アルタン・トプチ』とともに問題となると思われるのは通稱『シラ・トゥージ』の編纂年代と他の年代記，特に『蒙古源流』との關係である。後章でも紹介するように先行する多くの議論においては『シラ・トゥージ』が早く編纂され，『蒙古源流』はこれを利用したとされている。しかし14 - 17世紀のモンゴル史研究においては『シラ・トゥージ』よりも『蒙古源流』の方が多く利用されているが，これについて寶音德力根（2000，p. 131）は15世紀前半の北元可汗の世系の問題について論じる中で，「蒙文史書において，人々は主に《蒙古源流》に依據し，《蒙古源流》の直接的史料である《黃史（シラ・トゥージ)》と著者不明《黃金史綱（アルタン・トプチ)》に對する重視が不足している。北元汗の系譜の研究において少なからざる疑問，難點があるのは，《蒙古源流》を輕々しく信じたことから生じたと言える。」と述べている。筆者は『シラ・トゥージ』が『蒙古源流』に先行して編纂されたものという說に贊成できず，簡單な反證を試みたが（森川哲雄，同，pp. 230-233），その論證は極めて不十分であったので本稿ではこの點についてより詳細に檢討し，更にこの時代のモンゴル年代記との關係についても論じることにする。本稿の目的の一つはこうした初期のモンゴル年代記がどのような關連性を持って編纂されたのかを明らかにすることであるが，またそれと關連する問題についてもふれることにする。

2 『シラ・トゥージ』の編纂年代について

『シラ（シャラ）・トゥージ *Sira tuγuǰi*（黃史)』について，最も早くその存在についての情報を傳え，かつそれを研究に利用したのはウラディーミルツォ

(2) 近年內蒙古社會科學院藏の『チンギス・ハーンのアルタン・トプチ』というモンゴル文資料が公刊されたが（Doruŋγ-a, 1998），この資料について13世紀後半から14世紀前半の間に編纂されたもので，著者不明『アルタン・トプチ』はこれを重要な史料としたという見解が出されている（ibid., pp. 15-16)。しかしながらこの資料を詳細に檢討したところ著者不明『アルタン・トプチ』のゴムボエフ本系のテキストをもとにして，その冒頭に他の年代記にはないイェスゲイの事績を加えて編纂したもので，むしろ新しいものであることを明らかにした（森川哲雄，同，pp. 229-230)。

フである（Vladimirtsov, 1934）。彼が利用したのは1891年のロシアのオルホン探検によりラドロフによってもたらされたもので，この寫本は現在サンクトペテルブルクのロシア科學アカデミー東洋學研究所に所藏されている（A本）。この寫本は最初の數葉が缺けていてタイトルが記されておらず，このためウラディーミルツォフはこの年代記を「ラドロフの歴史」と呼んだ（ibid., p. 16）。しかし同じ內容を持った別な寫本がレニングラード大學（現サンクトペテルブルク大學）圖書館の所藏する所となり（C本），そこには *Erten-ü mongγol-un qad-un ündüsün-ü yeke sira tuγuǰi* のタイトルが記されていて[3]，このことからこの年代記は通稱『シラ（シャラ）・トゥージ *Sira tuγuǰi*』の名で呼ばれるようになった。この他に東洋學研究所には舊ポズドネーエフ所藏の不完全な別な寫本（B本）がある。このA，B，C本の關係についてジャムツァラーノはC本はA本が完本であったときに寫したもので，B本はロシア人によって書かれた不完全な寫本であると述べている（Žamtsarano, 1955, pp. 44-45）。

さらにモンゴル國，モンゴル國立中央圖書館に藏されている *Dalai blam-a-yin nomlaγsan ǰalaγusun qurim kemekü qad noyad-un üre teüke ene bolai* という年代記は，下線部をとって『ジャラグスン・フリム（若者の宴）』の名で呼ばれるが，これも『シラ・トゥージ』の寫本の一つ（D本）とされている（Heissig, 1959, p. 81）。この寫本（D本）とA本，C本の關係について言うと，D本は外モンゴルの王公の系譜が最後に記されていて，一應完結しているが，A本，C本はその後にチンギス・ハーンの兄弟の系譜，あるいは16世紀末の外モンゴルの歴史，その王公の系譜などが記されている。このことから，一般的にD本が古く，後にD本に無い部分を增補したのがA本，C本であるとされている（岡田英弘，1965，p. 23）[4]。

『シラ・トゥージ』には編纂年代も著者名も記されていないが，これまで特にその編纂年代について種々議論されてきた。これに關して最も注目されたの

(3) この寫本はポズドネーエフの所藏になるものであったという（Uspensky, 1999, p. 245）。

(4) この增補部分はチンギス・ハーンの諸弟の後裔の系譜，ゲレセンジェが外モンゴルの支配者になった事情，外モンゴルの王公の婚姻關係など，外モンゴル史にとって重要な情報を傳えている。

がC本に記されている表題である。周知のようにサガン・セチェンは『蒙古源流』を編纂したときに7種の史料を參照したことを記しているが，その第7番目に *Erten-ü mongγol-un qad-un ündüsün-ü yeke sira tuγuǰi* という表題の史料を記している（Urga. 97r）。これは上に示した『シラ・トゥージ』C本の表題と全く同じで，このことから現存する『シラ・トゥージ』が『蒙古源流』の利用した史料の一つであるという見解が出されるようになった。一般的に『蒙古源流』は1662年に編纂されたとされていて，そのことから『シラ・トゥージ』はそれ以前に編纂されたとする見解が多く支持されている。

例えば『シラ・トゥージ』について書誌學的側面からはじめて検討したジャムツァラーノはこれが段階的に編纂されたことを述べて，さらに「それがサナン（サガン）・セチェンがその奥書で言及しているものと同じものであると假定すると，その編纂の時期は17世紀前半になる。しかしサナン・セチェンによって述べられている王公やハンの名前は，この年代記が17世紀末頃に完成したことを示している。」（Žamtsarano, ibid., p. 48）と述べて，17世紀末頃に成立したと結論している[5]。ジャムツァラーノの見解では，その原典は早く『蒙古源流』より早く成ったが，その後それ以降の王公の系譜が書き加えられて，A本のような最終的なものが出來たのは17世紀末ということになる。これ以後の議論は基本的にこれと同じ前提で行われてきた。例えば『シラ・トゥージ』のテキストを公刊したシャスティナはその序文の中で次のように言う。「いずれにせよ『シャラ・トゥージ』は，17世紀の年代記の最も有名なものの一つ，内容豐かな『エルデニイン・トプチ』を編纂する際に利用された史料の一つとしてサガン・セチェンの年代記の奥書に述べられているものである。サガン・セチェンはその年代記を1662年に完成している。從って『シャラ・トゥージ』はいずれにせよこれによって，この時までに編纂された。以前我々の年代記とサガン・セチェンによって述べられている同じ名の『シャラ・トゥージ』との同一性について若干の疑いがあったが，今やこれらの疑いは，『エルデニイン・ト

(5) この問題について Perlee（1958, p. 15）は，『シラ・トゥージ』は17世紀半ばに書かれたという前提の下に，「この歴史〔書〕（すなわち『シラ・トゥージ』）には，それが編纂された後の100年餘りの歴史的狀況を，18世紀初めに增補して編纂したとすべき點がある。」と述べている。

プチ』の奥書に引用されている名前と我々の年代記のフルネームが完全に一致することのみならず，２つの年代記の一連のテキスト上の共通性もまた我々にそれを確信させる。若干の場合にはサガン・セチェンは『シャラ・トゥージ』のテキストをほとんど變更無しに利用している。」(Shastina, 1957, pp. 4-5)

ハイシッヒ（Heissig, 1959, pp. 83-84）は『シラ・トゥージ』の成立年代をより特定し，その可能な年代を1651-1662年の間とする。その根據について『シラ・トゥージ』に「アバナイ親王の子はブルニ王とロブサン。後裔が無い。チャハルに座した」(Shastina, ibid., p. 76）とチャハル王家の最後の後裔であるアブナイ王の第２子ルブサン（ロブサン）の名が記されているが，彼は1651年に生まれたこと[6]，『シラ・トゥージ』を「利用した」『蒙古源流』が1662年に編纂されていることを示している。また氏は『シラ・トゥージ』に17世紀末から18世紀初めに活動した人物の系譜が記されていることに言及し，知られている４つの寫本は時代的に18 - 19世紀の寫本であって，これらは基本的にあとで寫された際に增補されたものであるとしている。

この點について異論を出したのが岡田英弘（1965, p. 23）で，『ジャラグスン・フリム』(『シラ・トゥージ』Ｄ本）の編纂年代を「系譜中の人物が康熙四十年頃在世の人々を以て終わってゐる所から，やはり同年頃の著作と思はれる。」「この『ジャラグスン・フリム』に相當多量の書き足しが行はれたのがやはり無名氏撰の「シラ・トゥグジ *Sira tuγuǰi*」である。」と述べ，さらに「注意すべきことは，蒙古源流の奥書にその所據の７種の史料の第７にあげた *Erten-ü mongγol-un qad-un ündüsün-ü yeke sira tuγuǰi* と名は同じいが全く別書であることである。」と述べている。これは『シラ・トゥージ』に關する極めて重要な指摘であったが，この見解はその後の年代記の研究において全く取りあげられていない。

『シラ・トゥージ』の編纂年代をめぐるこれらの議論の中でまず問題とすべきはハイシッヒがとりあげたロブサンの生年についてである。ハイシッヒはその生年を1651年頃とするが，實際にはそれは不明である。他方その兄ブルニに

(6) ロブサンの生年については不明である。あとでも觸れるように1651年というのはアルタン・クルドゥンの記事によって導き出されるブルニの生年である。

關しては，『アルタン・クルドゥン』の記述から1651年が推定できる（森川哲雄，1983, p. 126)。またブルニが「王 vang」の稱號で呼ばれるのは，父アブナイの爵位，親王 čing vang を繼いだためであるが，これは康熙８（1669）年のことである（森川哲雄，同，p. 110)。また「二人に後裔がいない」という表現は，一般に後裔無しに亡くなった，と解釋すべきであるが，ブルニとロブサンは康熙14（1675）年に清朝に叛旗を翻した際に（ブルニ親王の亂）殺害されていて，その意味で「後裔がいない」というのはそれ以後の狀況を言ったとすべきである。從って『シラ・トゥージ』Ｄ本についてもそれが1675年以後に成立したことは疑う餘地がない。

ところでハイシッヒも指摘しているように現存の『シラ・トゥージ』には17世紀後半から18世紀初頭にかけて活動したモンゴルの王公の系譜が詳細に記されている。それらの中には17世紀末から18世紀初頭に爵位を繼承した人物が，その爵位を附して記されている例も見られる。年代的に下限となる人物の例を以下に何人か紹介してみよう。

1) 「トゥシェトゥ・ハン部のドルジ・オチル・トゥシェトゥ・ハン Dorǰi včir tüsiyetü qan」(Shastina, ibid., p. 86)。

『王公表傳』巻46，傳30，土謝圖汗察琿多爾濟列傳に記される多爾濟額爾德尼阿海にあたる。康熙41（1702）年に土謝圖汗を襲爵している。

2) 「ジャサクト・ハン部のチェワン・ジャブ・チン・ワン Čevan ǰab čing vang」(Shastina, ibid., p. 84)。

『王公表傳』巻61，傳45，原封扎薩克圖汗和碩親王策旺扎布列傳によれば，彼は康熙30（1691）年４月に和碩親王に任じられ，康熙42（1703）年に扎薩克圖汗を襲爵している。のち雍正10（1732）年にジュンガル軍との戰いで敗れ，その罪により扎薩克圖汗の位を剝奪された。しかし『シラ・トゥージ』には彼がジャサクトゥ・ハーンになったことについては記述がない。

3) 「サイン・ノヤン部のチン・ワン・シャムバ Čing vang Šamba」(Shastina, ibid., p. 89)

『王公表傳』巻69，傳53，扎薩克和碩親王善巴列傳に記される善巴にあた

る。彼は康熙35（1696）年に和碩親王 Qošoi čing vang の位を得ている。

4）ジャサクン・タイジ・サルワンジャ J̌asaγ-un tayiǰi Sarvanǰa（Shastina, ibid., p. 89）。

善巴の叔父，ロブサン・トイン Lobsang toyin の孫。『王公表傳』巻76，傳60，扎薩克一等臺吉素達尼列傳に記される薩喇旺扎勒にあたる。康熙39（1700）年に扎薩克一等臺吉となった。なおこのあとD本にはA本，C本にはないその子チャブタン・ジャサク Čabtan ǰasaγ の名が記されるが（Heissig, ibid., 22r），『王公表傳』（同）によれば彼は雍正元（1723）年に父の爵を繼承したと記されている(7)。

5）ミンジュル・ワン（ドルジ）Mingǰur vang（Heissig, ibid., 21r）。

彼は『シラ・トゥージ』のA本，C本に見られずD本にのみ記されている。『シラ・トゥージ』A本はゲレセンジェの第3子ヌグヌフ・ウイジェン・ノヤンの第2子アブフ・メルゲン・ノヤンの系譜について，アンハハイ・メルゲン・ノヤン Angqaqai mergen noyan，その第2子ソノ（ム）・ダイチン・ホンタイジ Sono[m] dayičing qongtayiǰi，さらにその子郡王グルスキ Gürüski までを記している。『王公表傳』巻47，傳31，扎薩克多羅郡王固嚕什喜列傳によれば彼は康熙30年4月に多羅郡王 Töröi geyung vang に封じられ，同44（1705）年に死去している。『シラ・トゥージ』D本はこのあとの系譜について「その子ラブタン・ドルジ・ワン Rabtan dorǰi vang，その子ミンジュル・ワン Mingǰur vang」と記している（Heissig, ibid., 21r）。ミンジュルは『王公表傳』（同）の敏珠爾多爾濟にあたる。彼は父多爾濟阿喇布坦が雍正6（1728）年に死去した後扎薩克多羅郡王の爵位を繼承したという。

上記に紹介したような例はこの他にも多いが，その爵位の繼承年代の下限はほとんどが康熙30年代末，すなわち17世紀末から18世紀初めまでで，5)のように雍正年間にまで及んでいるのは極めて僅かである。その意味でハイシッヒが

(7) この他サイン・ノヤン部のトゥメンケン・サイン・ノヤンの後裔にワンジル・グン Vangčil gün の名が記されるが（Shastina, p. 90），これは『王公表傳』巻73，傳57，扎薩克輔國公阿玉什列傳に記される旺扎勒にあたる。彼は康熙39（1700）年に祖父阿玉什の死後，扎薩克輔國公の爵位を繼承した。

述べているように一部の王公については後の書寫者が書き加えたことを否定するものではない[8]。しかしながらハイシッヒ，ペルレーの言うように，『シラ・トゥージ』の成立は17世紀半ばであり，のちに寫本が作られる段階で，それ以後の王公の系譜が大幅に「書き加えられた」，とする見解には贊成出來ない。『シラ・トゥージ』に記される，17世紀後半以降のモンゴルの王公の名前は極めて多く，書寫の段階で少しずつ書き加えられたとは到底考えられない。從ってこれらの系譜は最初から記されたと見てよく，この點に關して先に紹介した岡田氏の說を採るべきである。また本文中にブルニ，アブナイが「後裔なしに」亡くなった，と記されていることも，これが1675年以降に編纂されたことを實證するもので，そこに記された王公の系譜などと併せて『シラ・トゥージ』は18世紀初頭に編纂されたとすべきであろう。

3 『蒙古源流』と『シラ・トゥージ』との關係

前章で示したように現存する『シラ・トゥージ』は1675年のチャハルのブルニ，ロブサンの死を傳えているので，1662年に成立したとされる『蒙古源流』よりも後に編纂されたことは間違いないが，兩者の關係については後者が前者を史料として利用したという見解が一般的に認められている。最近の明代モンゴル史研究の中でもそのような見解が複數出されている[9]。しかしながらこうした見解は兩者の記述內容を比較して出された見解ではなく，『蒙古源流』が『シラ・トゥージ』より後に編纂されたこと，またそれを利用したという通說に無批判に從っているに過ぎない。その意味で本章では『蒙古源流』と『シラ・トゥージ』に記されているいくつかの記述を比較し，兩者の關係について檢討してみる。

(8) なお先の例は決してD本にのみ增補があるのではなくて，A本，C本に記されていてD本に記されていない系譜も多い。その點からA本やD本がそれぞれ獨自に一部の系譜が增補されたことは間違いないであろう。

(9) 例えば寶音德力根（2000, pp. 132, 137, 141-142, 148），烏蘭（2000, p. 290, n. 10, p. 300, n. 26）などである。

(1) インドの最初の王について

『蒙古源流』は古代インドを支配したとされる轉輪王について，最初の王，マハー・サムバディ王 Maqa sambadi ranǰa について觸れたのち，

> その子は妙高 Üǰesküleng-ün gerel-tü qaγan，その子は善 Buyan-tu qaγan，その子は勝善 Degedü buyan-tu qaγan，その子は頂生 Oroi-ača törögsen ülemǰi tedkün asaraγči qaγan，その子は自乳 Namai köge という王で，これらは最初の轉輪王と〔して〕有名になった。

とマハー・サムバディ王を含め全部で6人の名を記している（Urga. 3v)。これに對し『シラ・トゥージ』は單に

> マハー・サムバディ・ハーン以來自乳という王に至るまで6人の轉輪王として有名になった。

と記していて（Heissig, ibid., facsimile, p. 88, 2v, Shastina, ibid., p. 18)，『蒙古源流』に記されているマハー・サムバディ・ハーンと自乳の間の4人の轉輪王の名（下線部）を省略している。この轉輪王について著者不明『アルタン・トプチ』は

> インドの最初はマハー・サマディ・ハーンである。その子は妙高 Üǰesküleng gerel-tü qaγan，その子は善 Buyan-tu qaγan，その子は頂生 Tedkün asaraγči qaγan，その子は自乳 Namai köge（中略)，その子はウジェスクレン・ゲレルトゥ Üǰesküleng gerel-tü（中略)，その子はマシ・ウジェスクレントゥ Masi üǰeskülengtü（中略)，その子はサイン・ウジェスクレントゥ Sayin üǰeskülengtü（中略)，その子はテグス・ウジェスクレントゥ Tegüs üǰeskülengtü である。これらは五轉輪王と有名になった。」（ČQČ, pp. 1-2)

と記し，「五轉輪王」としながらも9人の名をあげている。『アサラクチ史』にはこのような轉輪王の名は記されていない。このことは『シラ・トゥージ』の記述が『蒙古源流』と近い關係にあること，また前者が後者の記述を參照しつつ，それを簡略に記したことを示している。

(2) 中國の皇帝の系譜

18世紀初めまでに編纂された初期の年代記において古代中國の皇帝の系譜に言及しているのは『蒙古源流』と『シラ・トゥージ』以外にはない。『蒙古源流』に記されている中國の皇帝の系譜は極めて長文であるので，極簡單に紹介すると，まず漢の高祖から隋の煬帝までの皇帝の名を記し，さらに唐については高祖から哀帝までの19人の皇帝の名を記している[10]。この後，宋には6代の皇帝，金には9代の皇帝があったことを記すが，宋，金の皇帝の名は記されていない。そしてこれに續いて最後に

> 戊戌（1058）年より137年〔經過した〕甲寅（1194）年にモンゴルのチンギス・ハーンが中國のマンズ・アルタン・ハーン（金皇帝）を追い出し，政權を取って，その33歳の甲寅年に，赤い國，80萬戸中國の13省をその力に入れて，ダイミン・ストゥ・ボグダ・チンギス・ハーンとて有名になった。

と締めくくっている（以上 Urga. 33r-35r）。『蒙古源流』の記す皇帝の系譜や名前，事績は不完全，不正確ではあるが，それはさておく[11]。『シラ・トゥージ』のこれに對應する部分は

> その（チンギス・ハーン）の33歳のときに，中國の最初の唐高宗（高祖）皇帝より19人のハンの御代が經つときに，金皇帝 Altan qaγan を追い出し，80萬戸中國の13州を降して，ダイミン・ストゥ・ボグダ・チンギス・ハーンとて有名になった。（Shastina, ibid., p. 23）

と記されている。ここでは中國の皇帝に言及してはいるが，『蒙古源流』の記す漢代から隋代に至るすべての皇帝の名を省略し，僅か唐の皇帝の人數だけを數えて「19人のハン（皇帝）」と記しているだけである。このことは『シラ・トゥージ』が『蒙古源流』を參照した場合には可能であるが，その逆は不可能

---

(10) 『蒙古源流』の多くの寫本は中國の皇帝に關する記述を漢の高祖から始めているが，*Erdeni-yin tobčiy-a* ではそれより前の周に關する記述も見られる。（Kökeöndör, 1987, p. 92）

(11) こうした古代中國の皇帝の系譜に關する記述は一部『フゥランテプテル』や『王統明示鏡』などのチベット語史料の記述と似ているが，必ずしもそれらの傳えるものと一致せず，サガン・セチェンがこの系譜を何に據って記したのかは明らかでない。

であることを示している。すなわちこの中國皇帝の記述についても『シラ・トゥージ』が『蒙古源流』を利用したことを證明している。

(3) チンギス・ハーンの遠征活動についての記述

チンギス・ハーンはモンゴル部統一の後，モンゴル高原を統一し，さらに西方遠征により世界帝國を建設する。この經過について『元朝祕史』はかなり詳しく記しているが，17世紀ころのモンゴル年代記にはほとんど正確な記述を見ることはできず，簡略化されていたり，多くの傳説が含まれている。『蒙古源流』も同様であるが，その33歳の甲寅（1194）年から47歳の戊辰（1208）年までに，中國のマンズ・アルタン・ハーン，サルタグルのジャリドゥン・スルタン・ハーン，トクマクのメングリク・スルタン・ハーン，ケレイトのオン・ハーン，ナイマンのタヤン・ハーン，ゴルラスのナリン・ハーン，ハルリグートのアルサラン・ハーン，チベットのクンガ・ドルジ王，サルタクチンのアムバガイ・ハーンを征服したことや，インド遠征についても比較的詳しく記している（Urga. 34v-37r）。

他方『シラ・トゥージ』は『蒙古源流』に近い記述をしているが（Shastina, ibid., pp. 23-25），その記述内容は大半が簡略化されている。ちなみに一例だけ紹介するとサルタグル遠征について『蒙古源流』は

> それよりその34歳の乙卯（1195）年にサルタグルに出馬するときに，そのときサルタグルのジャリルドゥン・スルタン・ハーンがサガリ・タルバガタイで迎えて會うときに，ソニトのギルゲン・バートゥルとマングトのフイリダル・ホシグチが先導して斬り，ジャリルドゥン・スルタン・ハーンを殺して，5省シラ・サルタグル國をその力に従えた。

と記しているのに（Urga. 35v-36r），『シラ・トゥージ』は

> その34歳のときにシラ・サルタグルのスルタン・ハーンを殺して5省サルタグルを取った。

とだけ記している（Shastina, ibid., p. 23）。これ以外の遠征についても多くはこのような記し方をしている。他の年代記について見ると，著者不明『アルタン・トプチ』では，サルタグル遠征についての極めて簡略な記述や（ČQČ, p.

35)，12人の悪い王を征服したという簡單な文章はあるが（同，p. 21)，その經過竝びに12人の王の名前を示していない。『アサラクチ史』にはそうした記述は見られない。ただしナイマン，メルキト，ソロンゴス，ハルラグト，オイン・イルゲン，オイラトをチンギス・ハーンの側近，子供たちが征服したという記述はあるが（Perlee, ibid., pp. 27-28)，これは『元朝祕史』第223-240節と同じである。ロブサンダンジン『アルタン・トプチ』は『元朝祕史』のチンギス・ハーンの遠征活動をそのまま引用し示しているが，別な箇所で，12人の悪い王を征服したという記述があり，その12人の王の名前を記している（Mostaert, 1952, II, p. 110)。しかしながらそこにあげている名で『蒙古源流』と一致するのは數名で，大半が異なっている[12]。いずれにせよこのチンギス・ハーンの遠征活動に關する記述も，『シラ・トゥージ』が『蒙古源流』のそれを節略して利用したことは明確で，他の年代記を利用した形跡はない。

(4) チンギス・ハーンが死の直前にギルゲン・バートゥルに應えた詩

チンギス・ハーンは西夏遠征から歸還途中で死去するが，多くの年代記にはそのとき側近のソニトのギルゲン・バートル Gilügen baγatur との閒に交わされた詩を記している。その詩に關して『蒙古源流』の殿版系テキストは著者不明『アルタン・トプチ』から一部の文を引用し書き加えていることが知られている（森川哲雄，1990, pp. 505-513)。ところが『シラ・トゥージ』はまさにその殿版系『蒙古源流』のその部分を參照しているのである。まず殿版系『蒙古源流』の文章は次の通りである（Haenisch, 1959, p. 97, IV-10a-10b)。

(1) qatan temür-tür durusun ügei.（硬き鐵に皮は無い）

(2) qayiran töröged beyen-dür möngke ügei.（慈しみ生まれた身にも永遠は

(12) ロブサンダンジン『アルタン・トプチ』（Mostaert, 1952, II, p. 110）にはこの12人の王を「悪い王」とし，タイチグトのタルグタイ・キリルトゥク Taryutai kililtuγ，ジュルケンのサチャ・ベキ Sača beki，三メルケトのトゥクタガ・ベキ Tuγtaγa beki，ケレイトの Ong qaγan，ジャジラトのジャムハ・ハーン Jamuq-a qaγan，ハルラグトのアルスラン・ハーン Arslan qaγan，オイラトのフドゥハ・ベキ Quduq-a beki，ホリ・トゥメトのボトフイ・タルフン Botoqui tarqun，ウイグトのイダグト Idaγud，ナイマンのタヤン・ハーン Tayan qaγan，タタルのメグチン・セグルトゥ Megüčin segül-tü，六ジュルチトのジャンチュン・ハーン Jančung qaγan の名をあげている。

無い)

(3) qaril bučal ügei yabuǰu (戻り退くことなく行って)

(4) qataγučin sedkigtün ta. (耐えるがよい，汝等)

(5) üile üiledün bütügebesü üile-yin oki. (事を行い完成すれば事の最高)

(6) ünen ügen-dür-iyen kürügsen kümün-ü sedkil beki. (眞の言葉に至った者の心は堅固)

(7) üčüken duran-iyar yabuǰu olan-luγa ǰoki. (少なき欲で暮らして多くと適應せよ)

(8) ünen-iyer negün nögčin odqu bey-e tan-u bui. (眞により移り，過ぎていく汝等の身である)

(9) (qubilai keüken-ü üge ni aǰiγ-tai γarunam bülüge.) (フビライなる子の言葉は注意深く出ている)

最後の括弧内の qubilai 云々の文章は他のテキストにも存在する。これに對應する『シラ・トゥージ』の文章は以下の通りである (Shastina, ibid., p. 46)。文の前に附した番號は上記『蒙古源流』の文と對應するものを示している。

(6) ünen ügen-degen kürügsen kümün-i sedkil beki. (眞の言葉に到達した者の心は堅固)

(5) üiledügsen üileben daγsuγsan kümün oki. (行った事をし終わった者は最高)

(7) üčüken dura bariǰu olan-luγ-a ǰoki. (少なき欲を持って多くと適應せよ)

(8) üneker negün nögčikü beye bisiu, yeke törö-ben saki. (眞により移り，過ぎていく身ではないか，大いなる政權を守れ)

(1) qatan temür-tür durusun ügei. (硬き鐵に皮は無い)

(2) qayiran törögsen beyen-dür möngke ügei. (慈しみ生まれた身にも永遠は無い)

(4) qataγuǰin yabuγtun. (努めて暮らすがよい)

(9) (qubilai keüken-ü üge ni aǰiγ-tai bui) (フビライなる子の言葉は注意深いのである)

これらのうち(1), (2), (5), (6), (7)の各文は順序が異なっているものの同じであり，(3), (4)の文が(4)として一文に短縮されている。そのため本來は4行詩の中に入らない qubilai 以下の文がここではその1行として入っているのである。ちなみに『アルタン・トプチ』(ČQČ, pp. 45-46) の文章は

qatan temür-tür durusun ügei. (硬き鐵に皮は無い)

qayiran törögsen beyen-dur möngke ügei. (慈しみ生まれた身にも永遠はない)

qaril bučal ügei yabuǰu (戻り退くことなく行って)

qataγučin sedkigtün ta. ǰaγun eki-tü (耐えるがよい，汝等，百の根源ある)

üilen-yi üiledün bütügebesü üile-yin oki. (事を行い完成すれば事の最高)

ünen ügen-degen kürügsen kümün-ü sedkil beki. (眞の言葉に至った者の心は堅固)

üčüken duran-iyar yabuǰu olan-luγa ǰoki. (少なき欲で暮らして多くと適應せよ)

ülene(ünen)-iyer negün <u>ečikü</u> bey-e tan-u bui. (眞により移り過ぎていく汝等の身である)

qubilai kegüüken-ü üge <u>öbere</u> buyu. (フビライなる子の言葉は別である)

とあり，下線部が異なっているが，殿版『蒙古源流』とほぼ同じである。なお『シラ・トゥージ』は上に引用した詩の前に

ünen sedkil-iyer yabuǰu ürgülǰi küčün-iyen öggügtün (眞實の心で暮らして常に其の力を盡くすがよい)

と言う一文があるが，これは同じく上に示した『蒙古源流』の詩の前にある，

ünen <u>siduryu</u> sedkil-iyer <u>nökočeldün</u> yabuǰu, (眞實，眞心により友となりあい暮らして)

ürgülǰi <u>mital ügegüi-e</u> küčün-iyen öggügtün ta. (常に恐れなくその力を盡くすがよい，汝ら) (Urga. 41r)

の2文の下線部を省略して1文にしたものに他ならない。これも『シラ・トゥージ』が『蒙古源流』を利用したことを證明しているが，この場合單にそれだけでなく，外モンゴルに流布していた『蒙古源流』の寫本の一つ『黃金の一

族の白い歴史 *Altan uruγ čaγan teüke*』の系統を引くものを利用していたことが分かる[13]。

(5) ゴデン・ハーンについて

モンゴル帝國の王統は，チンギス・ハーン以來，オゲデイ・ハーン Ögedei qaγan，ギュク・ハーン Gyüg qaγan，モンケ・ハーン Möngke qaγan と續くが，『蒙古源流』はギュク・ハーンの後にその弟ゴデン・ハーン Göden qaγan の卽位を記している（Urga. 42v-43r）。もちろんこれは史實に反することであるが，その卽位を認めているのは『蒙古源流』以外に『シラ・トゥージ』だけである（Shastina, ibid., pp. 47-48）。兩者は極めて類似した文章を記しているが，共にゴデン・ハーンが痛風になって，チベットの僧サキャ・クンガ・ゲルツェン Sasky-a künlga rgyalmzan の敎えによってそれを治癒したという話を記している。この話はやや長文であるのでその最初の部分だけを以下比較してみよう。『蒙古源流』は次のように記す。

> その（ギュクの）弟ゴデンという者は丙寅（1206）年生まれ，その29歳の甲午（1234）年にハーンに卽いて，己未（1259・乙未/1235）年に痛風を患って，誰が診ても助けることが出來なかったとき，「西方のラサにサキャ・クンガ・ゲルツェンという五明處に通じる大變すばらしい者がいると言う。彼を勸請すれば御利益があるだろう。」と言い合い，直ちにオイマグート Oyimaγud のドールダ・ダルハン Doorda darqan という者をはじめ使者を遣わして勸請させた。（Urga. 42v）

これに對應する『シラ・トゥージ』の記述は以下のようである。

> 弟はゴデン，寅年生まれ，29歳の午の年にハン位に卽いて，未の年に痛風となってラサにサスキャのクンガ・ゲルツェンという五明處に通じたラマがいると言う。彼を勸請するために使節を遣わしたとき，（Shastina, ibid., pp. 48-49）

---

(13) この點については森川哲雄（1995, pp. 2-7）參照。殿版のもとになったのは外モンゴルハルハ，サインノヤン部のチェングンジャブから乾隆帝に獻呈された『黃金の一族白い歴史』と稱される寫本であり，このようなタイプのものが外モンゴルにあったのであろう。

両者の記述を比較すると，ここでも『シラ・トゥージ』の記述は『蒙古源流』の下線部を省略したものであることが分かる。なおロブサンダンジン『アルタン・トプチ』(Mostaert, 1952, II, pp. 111-112)，『アサラクチ史』(Perlee, ibid., p. 41) では痛風に罹ったのはゴデンではなく父のオゲデイ・ハーンであるとしている。

(6) アルタン・ハーンがシタウ・ハンの稱號を得たこと

16世紀後半モンゴルで活躍した一人がトゥメトのアルタン・ハーンであるが，彼がハン（ハーン）の稱號を得た經緯について記しているのは『蒙古源流』，『シラ・トゥージ』と『アルタン・ハーン傳』だけで，両『アルタン・トプチ』，『アサラクチ史』には記されていない。このうち『蒙古源流』は次のように記している。

> 兄，ダライスン・ゴデン・ハーン Darayisun göden qaγan は甲辰（庚辰/1520）年生まれ，その29歳の戊申年に〔八〕白室の前でハーンの稱號を受け，右翼三〔萬戸〕と和平を結びあい戻って行くとき，〔サイン・〕アラクの第２子アルタンが迎えに來て，「玉座の主たるハーンの稱號を取り，その政權を平穩にした，あなたは。今ハーンの政權を守る者，シタウ・ハン Sitau qan という小ハンの稱號がある。私にその稱號を賜れ。私はあなたの大いなる政權を守りましょう。」と言ったとき，ハーンは同意してアルタンにシタウ・ハンの稱號を賜った。(Urga. 67v)

他方『シラ・トゥージ』は次のように記す。

> ゴデンはその29歳のときに〔八〕白室の前でハーンとなって戻ってくるとき，バルス・ボロトの第２子アルタンが，「あなたは大ハーンになった。私に政權を守るもの，シタウ・ハンの稱號を賜れ。」と言ったのに同意して，アルタンにシタウ・ハンの稱號を與えた。(Shastina, ibid., pp. 73-74)

両者の文章を比較すると明らかに『シラ・トゥージ』の記述は『蒙古源流』の下線部を省略したものである。なお『アルタン・ハーン傳』ではアルタンにハーンの稱號を與えたのはダライスンではなく，ボディ・アラク・ハーンであったとしていて（珠榮嘎，1991, p. 211，第66節），『蒙古源流』とは根本的に異

なっている。

以上6例をあげて『蒙古源流』と『シラ・トゥージ』の記述を比較し，両者の關係を檢討したが，いずれの例も『シラ・トゥージ』が『蒙古源流』の記述を簡略化して記していることが明らかである。この他にも同様の例證を多く示すことが出來る[14]。假に通説の『蒙古源流』が『シラ・トゥージ』を利用して編纂されたという立場に立つと，これら『蒙古源流』にあって『シラ・トゥージ』に無い記述はすべてサガン・セチェンが書き加えたものということになるが，それはここに示した多くの例からみて不可能である。すなわち具體的記述內容から見ても『蒙古源流』が先に編纂され，『シラ・トゥージ』がそれを參照して編纂したのである。

問題なのは『シラ・トゥージ』のC本になぜ『蒙古源流』が編纂した際に利用したとされる，*Mongyol-un qad-un ündüsün-ü yeke sira tuγuǰi* のタイトルが附けられているのかである。これに對する，說得力ある回答を見いだすことは困難である。しかし假說として，「『シラ・トゥージ』の編者が『蒙古源流』に記されている同名の史料の名を利用したのかもしれない」と述べたことがあるが（森川哲雄，2000, p. 232），やはり『シラ・トゥージ』C本の書寫者が，『蒙古源流』に記されているこの表題を借用した可能性が高いとみたい。ウルガ本や殿版のもとになった『黃金の一族の白い歷史』その他『蒙古源流』の寫本が外モンゴルに流布していて，『シラ・トゥージ』C本の書寫者が『蒙古源流』の內容をよく知っていたことは十分考えられるからである。

4 『アサラクチ史』と『シラ・トゥージ』との關係

以上通稱『シラ・トゥージ』が從來言われてきたよりはもっと後の編纂物であること，また多くの箇所で『蒙古源流』を利用していることを檢證した。しかしながら『シラ・トゥージ』は『蒙古源流』のみを參照して編纂されたので

(14) 例えばチンギス・ハーンの西夏遠征に關する傳說，元朝の皇帝の帝師に關する記述，ハーンの生沒年，卽位年代などでも『蒙古源流』と『シラ・トゥージ』は共通する點が多く，またその關係は基本的に後者が前者を參照したことが伺える。

はない。A本，C本の後半部にある増補されたとみられる文章は獨自のものであり，またハルハ・モンゴルの成立に關する重要な事實を傳えていて，ハルハ史研究にとっては第一級の史料である。またこの「増補」された部分はともかく，その前半部分に1677年にサイン・ノヤン部のシャムバ・エルケ・ダイチンによって編纂された『アサラクチ史』と密接に關係する文章が見られる。本章ではその觀點から檢討してみる。

(1) ダライ・ラマが說いたという書物からの引用

『アサラクチ史』と『シラ・トゥージ』の最初の部分にダライ・ラマ（5世）の著作を參照にしたという，他の年代記には無い文章が共通して見られる。すなわち『シラ・トゥージ』の最初に

> ダライ・ラマのお說きになったジャラグスン・フリムと言う歷史に，總じて人は自分の根源を知らなければ森に滿ちた猿に同じ。自分の氏 oboγ を知らなければ，トルコ石で光る龍に同じ。父，祖父のあれこれという書物を見なければ，まさに子供を忽然として失うことに同じ。(Shastina, ibid., p. 15)

と記される。他方，『アサラクチ史』の初めには

> ダライ・ラマが編纂した *sDsogs-ldan debter*（『ジャラグスン・フリム』）に，*rLang-un bse ru bodi*（『ラン氏一帙』）から格言を引用しているが，總じて生まれた人は自分の根源を知らなければ森の中の猿に同じ。人が自分の氏 oboγ を知らなければ，僞りのトルコ石の龍に同じ。父，祖父のあれこれという書物の巢（系圖か）を知らなければ，まさにその子供が忽然として消えて失うことに同じ，と言ったことと，（以下略）(Perlee, 1960, p. 7)

という文が見られる。これを見れば明らかなように，ここに紹介した『アサラクチ史』と『シラ・トゥージ』の記述は無關係ではない。『アサラクチ史』に言う *sDsogs-ldan debeter*（*deb ther rjogs ldan*）はダライ・ラマ5世の著作，*Gangs can yul gyi sa la spyod paḥi btho ris kyi rgyal blon gtso bor brjod paḥi deb ther rdsogs ldan gshon nuḥi dgah ston dpyid kyi rgal moḥi glu dbyangs shes bya ba bshugs so*（漢譯名『西藏王臣記』）のことで，モンゴル語名は下線の

部分（「若者の宴」の意）だけを譯して *J̌alayus-un qurim* として知られている（Perlee, ibid., p. 94, n. 2, Kämpfe, 1983, p. 44, n. 11）。この『西藏王臣記』は1643年に成立したものである（Perlee, ibid., p. 94, n. 3）。そのもとのチベット文（Perlee, ibid., p. 95, n. 4,『西藏王臣記』（藏文版），p. 117）を譯してみると次のようである。

> *rLangs-kyi-po-ti-bse-ru* に，總じて丈夫の者が自分の祖先を知らないならば，森林出身の猿と同じ。自分の母の血統（cho hbrang）を知らないならば，僞の龍と同じ。父祖の某々の事績を知らないならば，門隅の子供が歸途に迷うことと同じ。

このチベット文と上記の『アサラクチ史』，『シラ・トゥージ』の文を比較すると，『アサラクチ史』の方がチベット文に近い。また上記の『アサラクチ史』と『シラ・トゥージ』の文章を比較すると，原文にある下線部の記述が後者では脱落している[15]。なお『アサラクチ史』と『シラ・トゥージ』の編者がそれぞれ獨自に『西藏王臣記』のチベット文を見て譯したという考え方も出來るが，『アサラクチ史』にはこの他に『ダライ・ラマ三世傳』，『ダライ・ラマ四世傳』から譯している箇所があるのに對し（石濱裕美子，1986, pp. 22-25），『シラ・トゥージ』にはその他の箇所でチベット史料を直接譯したと見られる記述が無いことから，その見解は認めがたい。これらの點を考慮すると『シラ・トゥージ』の著者が『アサラクチ史』の文を參考にして整理して記したと考えるべきであろう。

(2) ダヤン・ハーンの諸子についての記述

明代モンゴル中興の祖とも言われるダヤン・ハーンには11人の男子と１人の女子があったとされる。注目されるのは正妃マンドゥハイ・ハトゥンから７人の男子と１人の女子が生まれたが，それらのほとんどが雙子で生まれたと記されていることである[16]。その中でも問題なのはその雙子の組み合わせについて

---

(15) なお省略された部分の *rLang-un bse ru bodi*（Tib. *rLang kyi [gdung rgyud] po ti bse ru*）は，『朗氏一帙』の譯名が示されている（『藏漢大辭典』第３册，p. 2732）。この他郭和卿（1983, p. 114）は「郎族的族譜《麒麟寶册》」と譯し，また劉立千（2000, p. 79）は「郎氏族譜《靈犀寶卷》」と譯している。

年代記間に相違がある點である。これについて『シラ・トゥージ』と他の年代記との關係について比較してみる。

『シラ・トゥージ』の記述（Shastina, ibid., p. 73）。

トロ・ボロト Törö bolod とウルス・ボロト Ulus bolod が雙子,

バルス・ボロト Barsu bolod とアルサ・ボロト Arsa bolod が雙子,

オチル・ボロト Včir bolod とアルチュ・ボロト Alču bolod が雙子,

アル・ボロト Al bolod とゲゲン・アバイ Gegen abai が雙子。

『蒙古源流』の記述（Urga. 62v）

トロ・ボラトとウルス・ボラトが雙子,

トロルトゥ公主 Töröltü güngǰü とバルス・ボラトが雙子,

アルス・ボラト Arsu bolad が1人で出生,

アルチュ・ボラトとオチル・ボラトが雙子,

アルボラトが1人で出生。

『蒙古源流』と『シラ・トゥージ』を比べると，その雙子の組み合わせが大きく異なっていることが分かる。すなわち『蒙古源流』ではダヤン・ハーンの第3子とされるバルス・ボラトと唯一の娘トロルトゥ公主が雙子であったと記しているのに對し，『シラ・トゥージ』は第3子バルス・ボロトと第4子アルサ（アルス）・ボロトが雙子であるとしている點である。それ以降の雙子の組み合わせが異なり，オチル・ボロトとアルチュ・ボロト，アル・ボロトとゲゲン・アバイが雙子であるとしている。ダヤン・ハーンの唯一の娘はここではゲゲン・アバイという名で記されていて，第7子アル・ボロトと雙子であったとしている。結局『シラ・トゥージ』ではマンドゥハイ・ハトゥンからは4組の雙子が生まれたとされ，『蒙古源流』が3組としている點でも異なっている。

---

(16) 1人の女性から3組あるいは4組の雙子が續いて生まれると言うのは信じがたいことで，何らかの操作がなされていることは間違いない。『蒙古源流』ではダヤン・ハーンが7歳，マンドゥハイ・セチェン・ハトンが33歳で結婚したとしているが（Urga. 62v），妃の方が年齢がはるかに高いのに8人の子が生まれたという不自然性を合理化させようとしたのかもしれない。

このことは『シラ・トゥージ』の編者がダヤン・ハーンの諸子に關する情報を『蒙古源流』以外の史料に據ったことを意味している。この點について他の年代記の記述を見てみよう。『アサラクチ史』の記述（Perlee, 1960, pp. 60-61）は,

トロ・バイフ Törö bayiqu とウルス・バイフ Ulus bayiqu が雙子,

バルスボロトとアルサボロトが雙子,

オチル・ボロトとアルジュ・ボロトが雙子,

アル・ブグラ Al buγura とゲン・アバガイ Gen abaγai が雙子。

と記している。この『アサラクチ史』のダヤン・ハーンの諸子の記述はまさしく『シラ・トゥージ』のそれと同じである。僅かな相違はトロ・ボロトとウルス・ボロトの「ボロト」が「バイフ」になっていることである。また著者不明『アルタン・トプチ』の記述（ČQČ, pp. 105-106）は,

トロ・ボロトとウルス・ボロトは雙子

アルス・ボロトとバルス・ボロトは雙子

ウチャル・ボロト Učar bolod とアルジュ・ボロト Alǰu bolod が雙子

アル・ブグラ Al buγur-a は1人

となっているが，この組み合わせ，順序を『シラ・トゥージ』のそれと比較してみると，マンドゥハイ・ハトゥンから7人の男子と1人の娘が生まれたとしながら，娘の名が記されていない。またバルス・ボロトとアルス（アルサ）・ボロトの順序が異なっている。ロブサンダンジン『アルタン・トプチ』は若干名前の表現が異なる點があるが，基本的に著者不明のものと同じである（Mostaert, A., ibid., II, p. 164, Bira, ibid., 160b-161a)。

『アルタン・ハーン傳』もダヤン・ハーンの諸子について記しているが（珠榮嘎，1991, pp. 193-194)，そこには誰が雙子であったかというような情報は記されていない。いずれにせよ初期の年代記においてマンドゥハイ・ハトンから生まれた8人の子を，4組の雙子としているのは外モンゴルの年代記だけである。これらを整理するとマンドゥハイ・ハトンから生まれた子に關する記述は a)『蒙古源流』，b)兩『アルタン・トプチ』，c)『アサラクチ史』と『シラ・トゥージ』，の3種類に分けられる。この點についても『シラ・トゥージ』と

『アサラクチ史』とは密接な關係にあるが，前記(1)の記述と編纂年代を考慮すると前者が後者を參照したとみる。

(3) リグダン・ハーンの稱號について

モンゴル最後の大ハーンと言われるチャハルのリグダン（リンダン）・ハーンの唱えた稱號について年代記間に相違が見られる。すなわち『蒙古源流』(Urga. 92v) や著者不明『アルタン・トプチ』(ČQČ, p. 126) は Lingdan qutuγ-tu qaγan とのみ記しているが，『アサラクチ史』，『シラ・トゥージ』，ロブサンダンジン『アルタン・トプチ』はかなり長い稱號を記している。これを以下に紹介する。

1)『アサラクチ史』(Perlee, ibid., p. 63)

Lindan qutuγ-tu sutu činggis dayiming sečen, ǰüg-üd-i teyin büged ilaγuγči bala čakrvati, dai tayisung tngri-yin tngri delekei dakin-i qurmusda altan kürdün-i orčiγuluγči nomun qaγan

2)『シラ・トゥージ』A本 (Shastina, ibid., p. 75)

Lingdan qutuγ-tu sutu činggis dayiming sečen ǰüg-üd-i teyin büged ilaγuγči bala tsakravartu, dai tayisun tngri-yin tngri, delekei dakin-u qurmusda, altan kürdün-i orčiγuluγči nom-un qaγan

3)『シラ・トゥージ』D本 (Heissig, ibid., facsimile, p. 102, 16v)

Lingdan qutuγ-tu sutu činggis dayiming seče(n), ǰüg-üd-i teyin büged ilaγuγči pala čakravarti, dai tayisung tngriin tngri, delekei dakin qurmusda, altan kürdün-i orčiγuluγči nomun qaγan

4) ロブサンダンジン『アルタン・トプチ』(Mostaert, A., ibid., II, p. 185, Bira, ibid., p. 172b)

Lingdan qutuγ-tu sütü činggis dayiming sečen, ǰüg-üd-i teyin büged ilaγuγči, tayisung tngri-yin tngri delekei dakin-u qurmusda, altan kürdün-i orčiγuluγči nom-un qaγan

上記の4種類のリグダン・ハーンの稱號を比較してみると，ロブサンダンジン『アルタン・トプチ』だけが『アサラクチ史』他の下線部を引いた部分，bala čakrvati (tsakravartu/čakravarti)，dai（「強力な轉輪王（Skt. pala cakravarti)，大？」）を缺落している。稱號の全體的意味はともかく，この點に關して『シラ・トゥージ』が『アルタン・トプチ』よりも『アサラクチ史』に近いことが注目される。この點についてもこれまで檢討したことを踏まえると，『アサラクチ史』→『シラ・トゥージ』という關係になる[17]。

以上本章では『アサラクチ史』に見られる獨自の記述が『シラ・トゥージ』にも一部見られることを紹介した。それらの記述は基本的に『シラ・トゥージ』が『アサラクチ史』を利用したものと見てよい。

5　17世紀のモンゴル年代記と18世紀のモンゴル年代記の關係

前章までは17世紀から18世紀初めにおいて編纂されたモンゴル年代記，特に『蒙古源流』，『アサラクチ史』，『シラ・トゥージ』について，それらの編纂年代との關係からそれらが史料として互いにどのように利用されていたのかを述べた。年代記編纂は17世紀前半に內モンゴルで始まり，17世紀後半期には外モンゴルでも編纂されるようになった。すなわち『アサラクチ史』や『シラ・トゥージ』がそれである[18]。前章に述べたように，この初期の段階では外モンゴ

---

(17) なおこのリグダン・ハーンの稱號について，Heissig (ibid., p. 84) は『シラ・トゥージ』の著者が，リグダン・ハーンの完全な稱號をロブサンダンジンの『アルタン・トプチ』から引用した，としている。この見解の前提は前章で紹介したように同『アルタン・トプチ』が17世紀半ば（1655年とする）に編纂されたとすることにあるが，それが成り立たないことは同所で述べた。また『アルタン・トプチ』の記すリグダン・ハーンの稱號は『シラ・トゥージ』の記すそれを一部缺いていることからも，Heissig の見解は受け入れがたい。むしろこのリグダン・ハーンの稱號は『アサラクチ史』→ロ氏『アルタン・トプチ』というように利用されたと考えるべきである。石濱裕美子（1986, p. 25）はその他の記述でもロブサンダンジン『アルタン・トプチ』が『アサラクチ史』を利用していることを明らかにしている。

(18) なお寶音德力根（2000, p. 155）は，『シラ・トゥージ』の書かれた場所について「《黃史》，《蒙古源流》等のオルドスで書かれた蒙文史書は左翼蒙古の祖先の記憶に對してやや模糊としている」と述べている。しかし『シラ・トゥージ』を「オルドス」で記されたとする點には同意できない。

ルの年代記の記述内容が内モンゴルの年代記の影響を大きく受けていることは明らかである。18世紀になってもモンゴル年代記は相當數編纂されているが，17世紀とは異なった狀況が見られる。すなわち外モンゴルで編纂されたものが内モンゴルの年代記に利用されるようになったことで，本章ではこの觀點から若干檢討してみたい。

まず1739年に編纂された『アルタン・クルドゥン *Altan kürdün mingyan kegesütü bičig*（金輪千輻）』は内モンゴル，ジャルート部のシレゲトゥ・グオシ・ダルマによって編纂されたものである（Heissig, 1958, p. 7）。シレゲトゥ・グオシ・ダルマはその奥書に「そのような理由により，何かに興味を持つときに，多くの種類の經典 sudur šastir，歴史 teüke などから，道理，内容の必要なものを補い採集して，得た通りに書いた。」（Heissig, ibid., VI, 4v, Čoyiǰi, p. 347）と記しているが，文中にいくつか利用した史料の名を示している。その一つは『元史』であるが，例えばフビライ・ハーンからその子成宗への政權交代を記している箇所で "*Dayuvan ulus-un bičig*（『元史』）" を參照したことが記されている（Heissig, ibid., VI, 4r Čoyiǰi, p. 118）。この他に注目されるのは，16世紀後半，アバダイ・サイン・ハーンがダライ・ラマ３世と接觸したことについて『アサラクチ史』を參照したと記していることである（Heissig, ibid., p. 68, Čoyiǰi, ibid., p. 230）。『アルタン・クルドゥン』で直接的に『アサラクチ史』を利用したと記している箇所はここだけであるが，その奥書に以下のような興味ある文章を記している。

> 總じて人はその根源を知らなければ，總じて森に滿ちた猿に同じ。大いなる由ある自分の氏，親族 yasu を知らなければ，大半を完成させたトルコ石の龍に同じ，と言った。尊き父祖の行いの道義が廣まった事情が何かを知らなければ，世の中に自分の子を失うことと同じ，と，第５世一切識者などの賢者がお説きになった。（Heissig, ibid., p. 95, VI, 4r）

これは前章の(1)で檢討した『アサラクチ史』や『シラ・トゥージ』の冒頭部分に記された，ダライ・ラマ５世の著作からの引用文と同じである。この部分について『アサラクチ史』を參照したとは記していないが，それを利用したことは間違いない。

前章でも述べたように『シラ・トゥージ』には『蒙古源流』や『アルタン・トプチ』などに記されていない獨特の文章が見られる。例えば『蒙古源流』では7歳のダヤン・ハーンと結婚して妃になったマンドゥハイ・ハトゥンがその直後にオイラト遠征を行ったことが記されているが（Urga. 62v），『シラ・トゥージ』は同じことを記している所で他の年代記に無い記述をしている。

> ドルベン・オイラトをタス・ブルトゥ Tas bur-tu の所で襲撃して取った後，法を〔定める〕，と言って座らせた。「お前たちはこれより後，自分のゲル（家）ger をオルド ordo と言うな。戸 örgö と言え。自分の房を2本の指よりも長くするな。あぐらをかいて座るな。跪いて座れ。肉を小刀で食べるな。口で噛み切って食べよ。アイラクをクミス čege と言うな。」と法を與えたとき，オイラト〔の者〕は「肉を小刀で切って食べ〔無ければ〕どうなろう。」と乞うたとき，「切らせて食べよ。」と言ったのである。今になるまでその法で暮らすのである。（Shastina, ibid., p. 72）

內容的にはおもしろい話であるが，史實とは無關係である。ただ18世紀前後のオイラト系の人々の風俗と何か關係があるのであろうか。この話は『アルタン・トプチ』，『蒙古源流』，『アサラクチ史』など初期の年代記に記述がなく，『シラ・トゥージ』にしか記されていない。ところがこの話は『アルタン・クルドゥン』や『ボロル・エリケ』など18世紀半ばから後半の年代記に記されている。例えば『アルタン・クルドゥン』には次のように記されている。

> 政權を裏切った四オイラトにサイン・マンドゥハイ・ハトゥンは大軍を出陣させ，タス・ボルトゥで戰って取ったのち，「ゲル ger をオルド ordo と言うな。オルゴ örge（戸）と言え。房を2本の指より長くするな。あぐらをかいて座るな。跪いて座れ。肉を小刀で食べるな。口で噛んで食べよ。アイラク ayiraγ をチェゲ čege と言うな。」と制裁した。オイラト〔の者〕は肉を小刀で食べることを乞うた。（Heissig, 1958, p. 45, III-21r, Čoyiǰi, ibid., p. 143）

---

(19) 『アルタン・クルドゥン』は引用した史料として『シラ・トゥージ』の名をあげていないが，これはシレゲトゥ・グオシ・ダルマが參照した，現在『シラ・トゥージ』と呼ばれている史料にそのような表題が附されていなかったためと考える。

これは基本的に『シラ・トゥージ』の記述と一致し，『アルタン・クルドゥン』が『シラ・トゥージ』から引用したことは間違いない[19]。また『ボロル・エリケ』の記述は次のようである。

戊子，第2年，夏の仲の月に，サイン・マンドゥハイ・ハトゥンはその兵馬を治め準備して，役人等，兵，英雄たちを連れ四オイラトを討伐するために自ら出馬して，タス・ブルトゥという場所でオイラトと戰って，大いに破りそれから進んで突入して，オイラト，オゲレト，タイチュート，ホイク，この4部の恨みある者をすべて懲らし殲滅して，その力に入れた後，サイン・マンドゥハイ・ハトゥンはそれら4部に法を布告するには，「自分のゲル（家）ger をオルド ordo と言うのをやめて 戸 öröge と言うがよい。自分の房を2本の指より長くするな。あぐらをかいて座るな。跪いて座れ。肉を刀で食べるな。自分の歯で食べよ。アイラクをチゲ čige と名附けよ。」と言ったとき，彼らが申し上げるには，「他のことはすべて禁止した通りにしましょう。ただナイフで肉を食べることをお許しください。」と乞うたとき，サイン・マンドゥハイ・ハトゥンは同意しお許しになった。(Mostaert, A., 1959, part III, pp. 160-161)

この『ボロル・エリケ』は1775年，內モンゴル，バーリン部のラシプンスクによって記された年代記であるが（岡田英弘，1965, p. 22），隨所に『アルタン・クルドゥン』を參照したことが記されていて（Mostaert, 1959, part III, pp. 124, 174, 190)[20]，そのことからも『ボロル・エリケ』が『アルタン・クルドゥン』を參照したことは疑いない。『ボロル・エリケ』のこの記述は『アルタン・クルドゥン』のものより多いが，ラシプンスクが書き加えたのであろう。

この他ダヤン・ハーンの諸子に關する記述も同様の傾向が見られる。前章でダヤン・ハーンの諸子に關して，マンドゥハイ・ハトゥンから生まれた子を4組の雙子であったとしているのは『アサラクチ史』に始まると述べたが，18世紀以降のほとんどの年代記もこれを踏襲している。すなわち『アルタン・クルドゥン』は，トロ・ボロトとウルス・ボロト，バルスボロトとアルスボロト，

(20) 『ボロル・エリケ』は『アルタン・クルドゥン』以外に10數種類の資料を利用していることが明らかにされている（Mostaert, 1959, part I, pp. 16-17)。

アルチュ・ボロトとオチル・ボロト，アル・ボロト Al bolod とゲゲン公主 Gegen güngǰü の4組が雙子とする（Heissig, 1958, p. 46, III, 22r）。これを『アサラクチ史』と『シラ・トゥージ』の記述と比較すると，ほとんど同じであるが，最後の2子について前者はアル・ブグラ Al buγura，ゲン・アバガイ Gen abaγai と記し（Perlee, 1960, p. 60-61），後者はアル・ボロト Al bolod，ゲゲン・アバイ Gegen abai としている（Shastina, ibid., p. 73）點が異なる。『アルタン・クルドゥン』がどちらを參照したのかはにわかに決めがたいが『シラ・トゥージ』の方に近いようである。なおこのダヤン・ハーンの8子について『ボロル・エリケ』も同じ記述をしているが（Mostaert, 1959, III, pp. 165-166），『アルタン・クルドゥン』を參照しているからである。他方1725年に編纂された『ガンガイン・ウルスハル』（Puchkovskij, 1960, facsimile, p. 29）もこの點について同樣の記述をしているが，これより早く成立したのは『アサラクチ史』，『シラ・トゥージ』であり，それらを參照した可能性がある。

この他1732年に內モンゴル，ハラチンのロミ Lomi によって著された『蒙古世系譜 *Mongγol borǰigid oboγ-un teüke*』はその記述內容から『蒙古源流』の影響を受けていることは明らかであるが[21]，マンドゥハイ・セチェン・ハトゥンから生まれた子について，トロボロトとウルス・ボロト，バルサボロトとアルサボロト，アルチュボロトとウチルボロト，アル・ボロトとトロルトゥ公主を雙子としている（Heissig, Bawden, 1957, p. 71）。この組み合わせは『蒙古源流』とは異なり，『アサラクチ史』と『シラ・トゥージ』と同じである。ただし唯一の娘の名をトロルトゥ公主 Töröltü güngǰü としているが，これは『蒙古源流』と同じである。從って『蒙古世系譜』は『蒙古源流』に主に依據しながらも，外モンゴルの『アサラクチ史』あるいは『シラ・トゥージ』の記

(21) Heissig（1959, p. 128）は『蒙古世系譜』が『アルタン・トプチ』や『蒙古源流』を利用したと言うことに觸れてはいるが，どの程度まで利用しているかについては言及していない。この點については包文漢，喬吉（1994, pp. 103-121，納古單夫執筆分）も變わりはない。しかし張爾田（1929, 27a）が「蒙古源流と相校するに，大なる出入無し」とすでに述べているように，『蒙古源流』と『蒙古世系譜』の多くの記述やハーンの在位年代などが基本的に一致している。その意味で『蒙古世系譜』が『蒙古源流』の記述を多く引用していることは明らかである。もちろん張爾田が同所で『蒙古源流』に無い記述もあることを指摘しているが，ロミが複數の史料を利用したということは不思議ではない。

述を一部利用したと見てよい。また外モンゴル，チェチェン・ハン部で編纂されたと思われる『アルタン・ナブチトゥ・テウケ *Altan nabčitu teüke*』という比較的新しい史料も，モンゴルのハーンの即位，在位年代の類似性から見て『シラ・トゥージ』と關連性が認められる（森川哲雄，1981）。

このように18世紀になると『アサラクチ史』や『シラ・トゥージ』など外モンゴルの年代記の寫本が內モンゴルにも流布するようになり[22]，それらが『アルタン・クルドゥン』，『ボロル・エリケ』，あるいは『ガンガイン・ウルスハル』など內モンゴルの年代記に多く利用されるようになったのである。18世紀には外モンゴルへの清朝の支配が浸透していくが，ここで觸れたようなモンゴル年代記の書寫を通して內外モンゴルの交流があったことは疑いない。

6 おわりに

以上17世紀から18世紀初頭にかけて編纂されたモンゴル年代記について，『蒙古源流』，『シラ・トゥージ』を中心にして，モンゴル年代記の史料的關係について述べた。この時代の年代記で明確に編纂年代を記しているものは『蒙古源流』と『アサラクチ史』だけである。その他のものは具體的な記述がないことから，編纂年代に關して多くの議論がなされてきた。その一つは『シラ・トゥージ』の編纂年代と他の年代記との關係である。現在一般に『シラ・トゥージ』と呼ばれる年代記の表題が『蒙古源流』が利用したとされる史料と全く同じこと，また兩者の間に類似した記述が多く見られることから，これが後者よりも早く，17世紀半ば頃に編纂された，という見解が，一部に反對意見は出されたが，ほとんど定說に近い形で認められてきた。

しかしながらこれらの見解は『シラ・トゥージ』の記述內容を十分檢討し出されたものではない。本稿では『シラ・トゥージ』と『蒙古源流』など他の年代記の記述內容を比較檢討し，『シラ・トゥージ』の記述は一つには『蒙古源流』を參照にしそれを省略したものが多く見られること，第2に1677年に編纂

(22) 但しこれら內モンゴルに傳わったはずの『アサラクチ史』や『シラ・トゥージ』などの古い寫本が，現在內モンゴルのどこかに殘されているという報告はない。

された『アサラクチ史』をも一部參照していることを明らかにした。その意味で『シラ・トゥージ』がこれら２つの年代記より後に編纂されたことを明確に證明した。また『シラ・トゥージ』Ｄ本や，これに書き加えのあるＡ本に17世紀末から18世紀初頭に活動し，爵位を得た王公の系譜が記されている點についても，基本的にそれは最初から書かれていたのであり，あとから書き加えられたのではないことも述べた。すなわち現在『シラ・トゥージ』と呼ばれている年代記は18世紀初頭に編纂されたことは疑いない。

最も大きな問題は『シラ・トゥージ』と稱されている年代記の表題が，『蒙古源流』に記されているものと全く同じであるということである。これについては後の書寫者が『蒙古源流』の奥書から表題を借用して附けたと考える。第５章でも紹介したように18世紀には內モンゴル，外モンゴルの間にそれぞれの地域で編纂された年代記が相互に利用されるようになっていて，『蒙古源流』が書寫者の目に觸れていたことは十分考えられるからである。

もちろんモンゴル史の事實關係については，必ずしも先行して編纂されたものが正しく，後から編纂されたものが常に二次的なものというわけではない。後から編纂されたものでも先に編纂された史料を複數檢討比較してむしろ史實に近い記述をしていることも多いのである。その意味で14世紀から17世紀のモンゴル史研究においてこれらモンゴル年代記を利用する際にはこうした點を十分考慮する必要があるのである。

參照文獻

『外藩蒙古回部王公表傳』（『國朝耆獻類徵初編』所收）（『王公表傳』と略稱）
張爾田（編） 1929:『蒙古世系譜』
石濱裕美子，福田洋一 1986:『西藏佛教宗義研究』第四卷—トゥカン『一切宗義』モンゴルの章—，東京，東洋文庫
岡田 英弘 1965:「ダヤン・ハガンの年代（上）」『東洋學報』48-3，pp. 1-26.
岡田 英弘 1967:「第４回野尻湖クリルタイ」『アジア・アフリカ言語文化研究所通信』3，pp. 18-19.
江 實 1940:『蒙古源流』，京都，弘文堂
江 實 1968:「Altan tobči について」『アジア・アフリカ言語文化研究所通信』5，pp. 16-19.

小林高四郎（譯注） 1939:『アルタン・トプチ（蒙古年代記)』東京，外務省調査部第三課

小林高四郎（譯注） 1941:『蒙古黄金史』，東京，生活社

森川 哲雄 1981:「アルタン・ナブチトゥ・テウケ Altan nabčitu teüke について」『モンゴル研究』12，pp. 1-31.

森川 哲雄 1983:「チャハルのブルニ親王の亂をめぐって」『東洋學報』第64-1・2，pp. 99-129.

森川 哲雄 1995:「『蒙古源流』の寫本とその系統について」『アジア・アフリカ言語文化研究』第50號，pp. 1-41.

森川 哲雄 2000:「『蒙古源流』と著者不明『アルタン・トプチ』との關係について」『蒙古史研究』第六輯，pp. 218-236.

森川 哲雄 2001:「『アルタン・トプチ』の寫本とその編纂年代について」*Mongolian Studies* (The Korean Association for Mongol Studies)，第11號，pp. 87-103.

吉田 順一 1972:「ロブサンダンジンの『アルタン・トプチ』に引用されている『蒙古の祕史』について」『東洋學報』55-1，pp. 1-34.

吉田 順一 1974:「ロブサンダンジンの『アルタン・トプチ』と著者不明『アルタン・トプチ』」『史觀』89，pp. 60-76.

吉田 順一 1978:「『アサラクチ・ネレト・イン・テウケ』と『モンゴル祕史』」『モンゴル學會會報』9，pp. 5-17.

和田 清 1959:『東亜史研究—蒙古篇』東京，東洋文庫

烏 蘭 2000:『《蒙古源流》的研究』，瀋陽，遼寧民族出版社

郭和卿（譯） 1983:『西藏王臣記』北京，民族出版社

珠 榮嘎 1991:『阿勒坦汗傳』呼和浩特，內蒙古人民出版社（『アルタン・ハーン傳』）

寶音德力根 2000:「15世紀中葉前的北元可汗世系及政局」『蒙古史研究』第六輯，pp. 131-155.

包文漢，喬吉 1994:『蒙文歷史文獻概述』呼和浩特，內蒙古人民出版社

劉立千（譯注） 2000: 五世達賴喇嘛著『西藏王臣記』，北京，民族出版社

anonymous 1925: *Činggis qayan-u čadig. Begejing*, Mongγol bičig-ün qoriy-a.（著者不明『アルタン・トプチ』）

Bira, Sh. 1978: *Mongol'skaya istoriografiya XIII-XVII vv.* Moskva, Nauka.

Bira, Sh. (ed.) 1990: *Altan tobči.* Ulaγanbaγatur, sinǰilekü uqaγan akademi.

Čoyiǰi (ed.) 1987: *Altan kürdün mingγan kegesütü.* Kökeqota, Öbör mongγol-un arad-un keblel-ün qoriy-a.（『アルタン・クルドゥン』）

Dorungγ-a 1998: *Činggis qayan-u takil-un sudur orosiba.* Kökeqota, Öbör mongγol-un arad-un keblel-ün qoriy-a.

Haenisch, H. 1995: *Eine Urga-Handschrift des mongolischen Geschichtswerks von Secen Sagang (alias Sanang Secen).* Berlin, Alkademi Verlag. (ウルガ本, Urga. と略稱)

Haenisch, H. 1959: *Die Kienlung-Druck des mongolischen Geschichtswerkes Erdeni-yin tobci von Sagang secen.* Wiesbaden, Franz Steiner Verlag GMBH. (殿版)

Heissig, W. & Bawden, C.R. 1957: *Mongγol borǰigid oboγ-un teüke von Lomi* (1732). Wiesbaden, Otto Harrassowitz. (『蒙古世系譜』)

Heissig, W. 1958: *Altan kürdün mingγan gegestü bičig, Eine mongolische chronik von Siregetü Guosi Dharma (1739).* Kopenhagen, Ejnar Munksgaad. (『アルタン・クルドゥン』)

Heissig, W. 1959: *Die Familien-und Kirchengeschitsschreibung der Mongolen I.* Wiesbaden, Otto Harrassowitz.

Heissig, W. 1965: *Die Familien-und Kirchengeschitsschreibung der Mongolen II.* Wiesbaden, Otto Harrassowitz.

Jamtsarano, Ts. J. 1936: *Mongol'skie letopisi XVII veka.* Moskva-Leningrad, Izdatel'stvo Akademii Nauk SSSR.

Kämpfe, H-R. 1983: *Das Asaraγči neretü-yin teüke des Byamba erke dayičing alias Šamba ǰasaγ.* Wiesbaden, Otto Harrassowitz.

Mostaert, A. 1952: *Altan Tobči, A Brief History of the Mongols.* (Scripta Mongolica I) Cambridge, Mass. Harvard University Press. (ロブサンダンジン『アルタン・トプチ』)

Mostaert, A. 1959: *Bolor Erike, Mongolian Chronicle.* Cambridge, Mass. Harvard University Press. (『ボロル・エリケ』)

Nasun (ed.) 1987: *Dai yuvan ulus-un bičig.* Qayilar, Öbör mongγol-un keblel-ün qoriya.

Perlee, Kh. 1958: *Mongolyn khub'sgalyn ömnökh vyeijn tvvkh bichlegijn asuudald.* Ulaanbaatar, Shinjlekh Ukhaan, Deed bolowsrolyn Khvreelengijn khewlel.

Perlee, Kh. (ed.) 1960: *Byamba: Asaraγči neretü-yin teüke.* Ulaanbaatar, Erdem shinjilgeenijn kheblekh vildber. (『アサラクチ史』)

Puchkovskij, L.S. 1953: "Mongol'skaya feodal'naya istoriografiya XIII-XVII vv." *Uchenye zapiski instituta vostokovedeniya VI.* pp. 131-166.

Puchkovskij, L.S. 1954: "Sobranie mongol'skikh rukopisej i ksilografov." *Uchenye zapiski instituta vostokovedeniya IX*, pp. 90-127.

Puchkovskij, L.S. 1957: *Mongol'skie rukopisi i ksilografy instituta vostokovedeniya I.* Moskva-Leningrad, Izdatel'stvo Akademii Nauk SSSR.

Shastina, N.P. 1957: *Shara Tudji, mongol'skaya letopis' XVII veka.* Moskva/ Leningrad, Izdatel'stvo Akademii Nauk SSSR. (『シラ・トゥージ』)

Uspensky, V.L. 1999: *Catalogue of the Mongolian Manuscripts and Xylographs in the St. Peterburg State University Library.* Tokyo, Institute for the Study of Languages and Culture of Asia and Africa.

Vladimirtsov, B.Ya. 1934: *Obshchestvennyj stroj mongolov, mongol'skij kochevoj feodalizm.* Leningrad, Izdatel'stvo Akademii Nauk SSSR.

Vostorikov, A.I. 1970: *Tibetan Historical Literature.* Calcutta, Indian Stuides Past & Present.

Žamtsarano, C.Z. 1955: *The Mongol Chronicles of the Seventeenth Century.* (translated by R. Loewenthal), Wiesbaden, Otto Harrassowitz.

Liu ǰin suo 1979: *Arban γurban dolodυγar ǰaγun-u mongγol-un teüke bičilge* Kökeqota, Öbör mongγol-un arad-un keblel-ün qoriy-a.

Ölǰeitü 1983: *Erten-ü mongγol-un qad-un ündüsün-ü Yeke sir-a tυγuǰi.* Begeǰing, Ündüsün-ü keblel-ün qoriy-a.

rGyal dbang lnga pa chen mos btsams pa 1981: *Bod kyi deb ther dpyid kyi rgyal moḥi glu dbyangs.* Pe-cin, Mi-rigs dpe-skrun khang. (『西藏王臣記』(藏文版)

neidan practice of Nanwu school of the Quanzhenjiao, he expounded the neidan practice of the Longmen school, and that Zhao Bichen expounded neidan practice and saw himself as the eleventh head of the Longmen school, although he was a lay person and not entirely faithful to the Longmen texts, the popularity of the neidan practice of the Wu-Liu school, and the relationship to the Zailijiao— I conclude that by considering these two men, one sees a direct indication of the concrete conditions of neidan, which was intermixed with various elements at the time.

THE CHRONICLES OF THE MONGOLS FROM THE SEVENTEENTH TO EARLY EIGHTEENTH CENTURIES: WITH PARTICULAR EMPHASIS ON THE RELATIONSHIP BETWEEN THE *ERDENI-YIN TOBČI*, (CHINESE, 蒙古源流) AND THE *SIRA TUγUǰI*

MORIKAWA Tetsuo

This article re-examines previous theories concerning the problems regarding the Mongol chronicles compiled in the seventeenth and eighteenth centuries, and then suggests how they should be employed in the study of Mongol history from the Ming to early Qing dynasties. The authors and dates of compilation of many of the chronicles from this period have not been recorded, and although bibliographic studies of the works have continued, many problems remain unanswered. One of these problems concerns the chronicle *Sira tuγuǰi* and its relation to the *Erdeni-yin tobči*. It has been known that the title *Erten-ü mongγol-un qad-un ündüsün-ü yeke sira tuγuǰi* has been affixed to one manuscript of the *Sira tuγuǰi*, and that this corresponds to one of the seven works employed in the compilation of the *Erdeni-yin tobči*. Given this fact, prevailing opinion has been that the *Erdeni-yin tobči* was compiled after the *Sira tuγuǰi*, and is that the *Sira tuγuǰi* was used in the compilation of the *Erdeni-yin tobči*, however, by comparing the contents of the *Erdeni-yin tobči* and the *Sira tuγuǰi*, I have confirmed that the two works share many passages, and although the *Sira tuγuǰi* appears to abbreviate many portions of the *Erdeni-yin tobči*, the *Erdeni-yin tobči* was compiled earlier and I have indicated in this article that the prevailing view is mistaken. I have also made clear the fact that the *Sira tuγuǰi* employs the *Asaraγči neretü-yin teüke*, which had been compiled in 1677. Additionally, given the fact that the lineage of princes recorded in the *Sira tuγuǰi* records the names

of those ennobled early in the eighteenth century, this also provides confirmation of the fact that the work was compiled in the early part of the eighteenth century. On the other hand, concerning the fact that one manuscript of the *Sira tuγuǰi* has the same title as one of the works consulted in the compilation of the *Erdeni-yin tobči*, it may be supposed that a later copyist familiar with the content of the *Erdeni-yin tobči* reused it. Additionally, although the chronicles compiled in Inner Mongolia in the seventeenth century influenced the chronicles produced later in Outer Mongolia, it is also clear that, in the eighteenth century, chronicles compiled in Outer Mongolia influenced those from Inner Mongolia.

THE SIGNIFICANCE OF "THE TALE OF OGHUZ KHAN" IN THE STRUCTURE OF THE *JĀMI'AL-TAWĀRĪKH*

UNO Nobuhiro

This article makes clear several points, listed below, regarding the important meaning in terms of structure accorded "the Tale of Oghuz Khan" that appears at the start of "The History of the Mongols," which occupies the first scroll of the *Jāmi'al-Tawārīkh (Universal History/A Collection of Histories)* of Rashīd al-Dīn.

First, in order to situate the Mongols in the genealogy of the various peoples in Islamic world history, the Mongols were taken as a Turkic people, and as a method of linking the Turks and Mongols, the place of Turk, the ancestor of the Turks in traditional lineages of various peoples in Islamic world history was replaced with "The Tale of Oghuz," in which Oghuz appears as the hero of the Turkish people, in the first scroll of "The History of the Mongols."

Second, the theme of "The Tale of Oghuz" is the Islamization of the Turkish people, and although the tale originally had no relation to the Mongols, Rashīd managed to create a history that explained without contradiction the inclusion of the Mongols among the Turkic peoples through his examination of their genealogy that was worked into the narrative of the tale linking of the various Turkic and Mongolian nomadic peoples.

Third, in the first scroll, "The History of the Mongols," the fact that Mongols have been categorized among those defeated by Oghuz Khan appears at first glance inexplicable. However, the significance of "The Tale of Oghuz Khan" is as a prelude highlighting the concluding "The Record of Ghazan Khan," in which Ghazan's conversion to Islam and the various policies of Ghazan Khan as Islamic